

「佐屋街道」と伊勢湾(七里の渡し) について

徳川家康が設置した旧東海道の宿駅のうち、宮宿(熱田)から桑名宿は東海道唯一の海路「七里の渡し」として有名ですが、天候や安全性の面もあり、渡海を避けた迂回路として、家光の代に尾張藩初代藩主・徳川義直が、陸路6里・水路3里の「佐屋街道」を開いたと言われています。

「佐屋街道」は、宮宿から桑名宿に向けて、岩塚宿・万場宿・神守宿・佐屋宿と陸路(6里)で繋ぎ、佐屋宿から桑名宿へは水路(3里)で繋がっていました。

この地域、濃尾平野・木曾三川の河口域は海拔が低く、伊勢湾を通る海路「七里の渡し」として繋げられ訳ですが、江戸時代には数多くの輪中(わじゅう)が水害を防いできた地域でもあり、このため、各地を結んで生活物資を運ぶ水路もたくさんありました。

「七里の渡し」は伊勢湾を通る海路として、別名「外回り」とも言われましたが、宮宿から現在の長島町(桑名市)に繋がる「中回り」や、佐屋宿から桑名宿の間の「内回り」などがあったようです。

「伊勢湾ぶらあるき」は、伊勢湾(海)にいちばん近い陸域を歩いてみることを基本にしていますが、伊勢湾奥部の名古屋港から四日市港あたりは開発や土地利用が進んでいるため、直近の道からは伊勢湾が見えないところや交通量が多く危険もあり、残念ながら「ぶらあるき」には適さないところも多くあります。

このため、伊勢湾を知る上で、歩くこととは方法は違いますが「七里の渡し」を船で行ってみることも不可欠と考えており、機会があれば「ぶらあるき」の一環として体験してみたい(以前、一度あり)と思っています。

今回は、旧東海道「七里の渡し」と並行する脇街道「佐屋街道」を2回(第12・13回)に分けて、陸路40km(10里)を歩いてみました。
(加藤)

